

青森県における初期テレビ受容

——下北郡佐井村，八戸市を事例として——

早稲田大学大学院 太田美奈子

1 目的

本報告は地方における初期テレビ受容の一例として、青森県内で顕著な受容の動きが見られた下北郡佐井村，八戸市に着目し、1950年代青森県のテレビ受容を明らかにするものである。これまで、初期テレビ受容をめぐる議論は大都市を中心に語られてきた。例えば、力道山に代表されるような街頭テレビの集団視聴によってテレビ熱が加速したことは定説となっているが、街頭テレビが設置された地域は基本的に関東と関西に留まっている。それに加え、電波塔の設置状況、大都市と地方の間にあった社会的・文化的差異を踏まえると、日本各地で画一的なテレビ受容の姿があったとは考えにくい。初期テレビ受容を地方から掘り起こす作業によって、東京中心のテレビ受容史を相対化し、初期テレビに開かれていた様々な可能性を提示する。日本の初期テレビ史を地方の視点から描き直す試みである。

2 方法

地域の生活や地理的な条件に根ざしたテレビ受容史の研究が必要だと考え、各市町村のテレビ受容について、当時を生きた人々の声と当時の資料から民俗誌的に編み直していった。佐井村では2016年9月と2017年9月に全9日間、八戸市では2017年3月から10月のうち全14日間、フィールドワークを行っている。実際にテレビ受容を体験した方々や重要人物のご子息からの聞き取り、また地元紙や行政資料、学校史などの資料収集を調査の中心に据えた。

3 結果

1957年のNHK函館テレビ局開局によりテレビの視聴環境が整った佐井村では、その教育熱心な土壌から、テレビを新しい視聴覚教材として受け止め、村内すべての学校にテレビを設置した。「子どもたちに外の世界を見せたい」という僻地ならではの願いがテレビ熱を高め、村ぐるみでテレビを受容していく。普及率が県内1位となった小さな漁村は「テレビ村」と呼ばれた。八戸市は漁業都市であることから無線通信に関心の強い地域だが、1956年にNHK仙台テレビ局が開局した際、船舶の無線通信士を養成する八戸高等電波学校がはるか250km離れた仙台からの電波受信に成功した。これが大きな話題となり、その後民間の放送局設立を構想するに至ったが、政治家の助言により頓挫した。

4 結論

佐井村と八戸市では、それぞれの土地の文脈からテレビを視聴覚教材や通信の延長線上に位置付け、地域住民が自発的に受容しようとした姿があった。県内では1959年のNHK青森テレビ局開局によって多くの地域でテレビが視聴可能となり、受像機の普及が急速に進んでいく。テレビ受容の多様な姿は見られなくなった。テレビが現在のような文化形式に収斂されるまでの短い時期、青森県では1950年代がそれに当たるが、地方においてテレビという文化形式は未だ不確定であり、テレビを豊かに受容する萌芽があった。

文献

飯田豊，2016，『テレビが見世物だったころ——初期テレビジョンの考古学』青弓社。

吉見俊哉，2003，「テレビが家にやってきた——テレビの空間 テレビの時間」『思想』（956）。